

【概要】

2. 鳥類

鳥取県から記録されている鳥は、迷鳥記録の扱い等によって若干ぶれるが、約360種（亜種を数えると約370種）。迷鳥や、前回のリスト作成以後に記録されたハジロミズナギドリ、キガシラセキレイ、チョウセンウグイスなどを含む：一澤ら 2008, 神谷 2008, 神谷・桐原 2005)。日本海の乏しい干満差と、概して距離が短く豊富な水量を保ったまま海岸まで一気に流れ込む河川地形のため、県内には干潟の発達が悪く、干潟を春秋の渡りの中継地として利用する各種のシギ、チドリ類の観察には恵まれない。いっぽう、中海や東郷湖、湖山池などの大きな内海面、湖面は、ハクチョウ類（おもにコハクチョウ）や各種のカモ類に一大越冬地を提供している。また、県内には標高において中国第1の大山、第2の氷ノ山があり、また、氷ノ山周辺は積雪量が多いためか、その標高の割には北方系の動植物を多く育てている。留鳥として生息するイヌワシはその代表例であるが、他にもクロジ、コルリ、ルリビタキ、メボソムシクイなどの、ふつうは亜高山帯で繁殖する夏鳥が、明確な繁殖確認例を欠いてはいるが、少なからず繁殖していると目されている。

鳥類からは今回は75種がレッドリスト掲載該当として取り上げられた（前回は78種）。内訳（括弧内は前回）は絶滅2（2）、絶滅危惧Ⅰ類15（9）、絶滅危惧Ⅱ類15（14）、準絶滅危惧40（44）、情報不足3（9）である。前回掲載されていた種のうち次の5種は県内では比較的安定して生息していると判断され今回はランク外となった：シロエリオオハム、ヤマドリ、アオバト、カワセミ、センダイムシクイ。

絶滅として選定されたのは、タンチョウとコウノトリの2種である。これらは迷鳥として稀に県内に出現することがあるが、1）県内の縄文・弥生期の遺跡からの骨の出土に、2）近世まではふつうに見られた種と推測されること、3）今日では繁殖の可能性や、定期的な越冬地として本県を利用する見込みがないことを考慮し、「絶滅」該当と判断された。

食物連鎖において上位に位置する動物ほど、一般に個体数は減少する。これは栄養段階を1段上がるごとに下位から流入するエネルギー量が10%程度に下がるため（10%ルールとよばれる）と、捕食者は栄養段階が下位の動物を捕食するにはより大きな体を必要とするからである。食物網

の頂点に位置する猛禽類は、そのような理由でもともと個体数が少なくレッドリストの常連でかつ高ランクの危険度で判定される種が多くなることが避けられない。また、栄養段階が高位の動物には、体外に排出されにくい農薬（DDTなど）、有機塩素系物質（ダイオキシンなど）、水銀や鉛などの有害重金属が高濃度で蓄積されるという現象（生物濃縮といわれる）があり、とくに海洋や沿岸域に生息する猛禽類（オオワシやオジロワシなど）では重大な死亡要因となっている。本県に生息が確認されるタカ目19種のうち、15種（79%）、フクロウ目6種のうち5種（83%）が今回の県版リストでも選定され、両者をあわせて鳥類のリスト掲載種全体の27%を占める。タカ目には上記のような問題の他、近年では風力発電用の風車への衝突事故も懸念材料となっている。前回の県版レッドリスト選定後に鳥取県の特定希少野生動植物に指定されたイヌワシとクマタカの生息地とその周辺での風車建設は嚴重に慎むべきであろう。

鳥のリスト選定種全体では県内で繁殖する（またはその可能性がある）ものが45種（62%）、越冬地としてのみ利用するものが27種（37%）である（比率計算の分母に絶滅の2種は除外）。本県が越冬地として利用されているだけのものも全国的あるいは世界的に絶滅のおそれの高い種（たとえば、クロツラヘラサギ、オオワシ、オジロワシなど）の保護は大切であり、本県のRDBでも高ランクに評価された。しかし、同ランクでも、よりいっそうの注意を必要とするのは、一般的には冬鳥あるいは旅鳥よりも、留鳥あるいは夏鳥として県内で繁殖する鳥である。

絶滅危惧Ⅰ類に挙げられた15種のうち県内で繁殖する（または繁殖可能性がある）のは、ミゾゴイ、イヌワシ、クマタカ、オオジシギ、コアジサシ、ブッポウソウ、ヤイロチヨウ、カヤクグリ、メボソムシクイ、ホオアカの10種である。なかでも、イヌワシは最も絶滅が危惧され細心の注意が必要である。

フクロウ、アオバズク、コノハズクなどフクロウ科の鳥類、オオアカゲラなどキツツキ科の鳥類、アカシヨウビン、ゴジュウカラ、ブッポウソウ、オシドリなどは、樹洞を伴うような大木の存在する自然林の減少が要因の一つとなっている。ブッポウソウは、かつて営巣に利用された木製電柱がコンクリート製電柱に置換されることで営巣適地

が減少していたが、前回の県版レッドリスト選定直後に県条例で鳥取県の特定希少野生動植物に指定され、県の補助のもと、巣箱かけなどの保護活動がなされており減少にいちおうの歯止めがかかっていることは喜ばしい。

里山や農耕地あるいは社寺林など、営巣場所や餌となる小動物が豊かに存在した伝統的な農村環境の変化が希少化の要因となっていると考えられるものもある。サシバ、コミズク、フクロウなどがそうである。

河川や湖沼などに生息する水鳥として、カモ科、サギ科、トキ科、チドリ科、シギ科、クイナ科など計23種が選定されているが、その約8割の種の希少化の要因は生息地の改変である。コハクチョウやマガンの類の生息には、餌場として広大な水田地帯の存在が欠かせないが、その減少や改変も影響を及ぼしているとみられる。チュウサギのように水田でも昆虫を捕食する種も、水田環境の改変によって減少しつつある。サンカノゴイ、ヨシゴイ、セッカ、チュウヒ、ハイイロチュウヒなどは、水辺のヨシ原の減少が直接的な希少化の要因となっている。また、コアジサシのように、河口の河川敷につくられる営巣地への人の立ち入りなどにより繁殖数が著しく減少した種もみられる。

一方、夏鳥として飛来する渡り鳥のなかには近年個体数の減少が全国的に問題視されている種がいくつかある。サンコウチョウ、ヨタカなどがそうであるが、これらの種の減少には東南アジアなどの越冬地での生息環境の変化が影響している可能性もある。

(一澤 圭・鶴崎展巨)

■引用文献

- 一澤 圭・加藤貞和・加藤益子 (2008) 鳥取県におけるキガシラセキレイの初記録. 山陰自然史研究, 4: 57.
- 神谷 要 (2008) 米子水鳥公園において捕獲された本州初記録のチョウセンウグイスについて. ホシザキグリーン財団研究報告, 11: 303-306.
- 神谷 要・桐原佳介 (2005) 鳥取県米子市の弓ヶ浜で保護されたハジロミズナギドリ. 山階鳥類学雑誌, 37: 72-74.
- 鳥取県農林水産部森林保全課 (2003) 第57回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌. とつとりの野鳥, 鳥取県農林水産部森林保全課, 137 pp.



クロツラヘラサギ



マガン



コハクチョウ



イヌワシ



コアジサシ



ブッポウソウ

サンカノゴイ コウノトリ目サギ科
Botaurus stellaris (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)



米子市淀江町佐陀川 2001.2.6 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：確認記録が少なく、確認地もごく限られている。生息地であるヨシ原の減少により、生息環境が年々悪化している。

■**特徴**：全長約70 cm。ずんぐりとした体型で、淡黄褐色の体に暗褐色の複雑な斑紋が全身に散りばめられている。脚は黄緑色。繁殖期に「ポォー、ポォー」と鳴く。広大なヨシ原に潜んでいるが、ヨシ原の縁にも時々現れる。水辺の小動物を捕食する。

■**分布** 県内：米子市米子水鳥公園、米子市淀江町佐陀川河口で記録がある。中海の島根県側や宍道湖では時々確認されているが、県内では近年記録がない。県外：北海道、茨城県、千葉県、滋賀県などで繁殖し、本州以南には冬鳥として飛来する；ユーラシア大陸の中部、アフリカ北部および南部で繁殖、北方の個体は冬に南下。

■**保護上の留意点**：ヨシ原の中に潜んでいるうえに、ヨシ原にとけ込む羽色で発見が困難なため、生息状況を確認しづらい。ヨシ原の保全が重要。

■**文献**：34.

執筆：桐原佳介

ヨシゴイ コウノトリ目サギ科
Ixobrychus sinensis (Gmelin, 1789)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



抱卵するヨシゴイ 広島市西区 2009.7.15 / 撮影：原 竜也

■**選定理由**：分布の局限度が高い。

■**特徴**：全長35 cm前後。山吹色の小型のサギ。夏鳥として、県内の河川敷・湖沼ヨシ原に飛来し、そこで5-7月にかけてお椀のような巣を作る。ヨシ原から出てこないため観察されにくい。小魚などをおもな餌とする。

■**分布** 県内：中海周辺のヨシ原、米子水鳥公園、鳥取市湖山池。県外：スリランカ、インド、中国、日本など東アジアを中心に繁殖し、日本では、西南諸島以南で越冬する。

■**保護上の留意点**：河川敷内・湖畔の公園化、護岸工事によるヨシ原の減少により急速に生息地が減少している。親水公園の設置や河川敷内での工事には注意が必要。

■**文献**：—

執筆：神谷 要

ミゾゴイ コウノトリ目サギ科
Gorsachius gossagi (Temminck, 1835)

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)



広島県神石高原町 2009.4.13 / 撮影：渡辺健三

■**選定理由**：日本のみで繁殖し、生息環境の減少から個体数はきわめて少なくなっている。鳥取県内の最近10年の確認は2個体のみである。

■**特徴**：ゴイサギに似るが、少し小さく色は茶色に見える。4-5月に越冬地の東南アジアから渡来し、低山地の深い林や寺社の森で繁殖する。渡来期の夕方から夜間、太い低音でポォーあるいはポォーと連続して鳴く不気味なさえずりは、昔から話題になっていた。夜行性といわれるが、採餌は昼間で、沢や林下でサワガニやカエル、ミミズなどを採る。

■**分布** 県内：東中部で4カ所の営巣記録があり、目撃は東中西部にある。県外：本州、四国、九州、伊豆諸島。

■**保護上の留意点**：よく繁った薄暗い林と営巣のために高所に横枝をもつ高木が必要であり、人里に近い場所のこのような環境を維持する必要がある。

■**文献**：—

執筆：國本洸紀

ササゴイ コウノトリ目サギ科

Butorides striatus (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



若鳥 広島県府中町 1992.10.5 / 撮影：栗原築波

- 選定理由**：繁殖地・生息地の減少により，個体数の減少が心配される。
- 特徴**：全長45 cm程度の灰色の小型のサギで，ゴイサギとは，大きさや目の色などで識別できる。夏鳥として県内の河川敷・湖沼に飛来し，5月から7月に水辺の樹木にお椀状の巣を作る。水辺で小魚・小動物を食べる。
- 分布** 県内：千代川，天神川，日野川など。県外：アムール川，ウスリー川周辺，朝鮮半島，日本，中国などで繁殖し，台湾，フィリピン，ボルネオで越冬する。
- 保護上の留意点**：河川敷内・河畔の公園化，農村部の水辺の樹木地の伐採や土地の改編によって急速に繁殖地が減少しつつある。親水公園の設置や河川敷内での工事には事前に十分な配慮が必要。
- 文献**：11, 64.

執筆者：神谷 要

チュウサギ コウノトリ目サギ科

Egretta intermedia (Wagler, 1829)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子水鳥公園 2008.5.9 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：水田環境の変化により，全国的に個体数が減少している。県内では比較的多く確認されているが，繁殖状況は不明。
- 特徴**：全長65 cm。全身白色で，脚は黒い。嘴は夏羽では黒く，冬羽では黄色くなる。ダイサギと似ているが，口角が目の後方を越えないことで識別できる。草地，水田，湖沼などに生息するが，水辺よりも草地を好む傾向が強い。昆虫やカエル等の小動物を捕食する。
- 分布** 県内：各地。県外：夏鳥として本州以南に飛来し，本州，四国，九州，佐渡で繁殖。九州南部から南西諸島では越冬する個体もいる。朝鮮半島から中国，東南アジア，インド，オーストラリア，アフリカ。
- 保護上の留意点**：おもな生息地である水辺の草原の保全と，繁殖環境の保全が重要。繁殖の際には他のサギ類と混じってコロニーを形成するので，サギのコロニーに対する苦情対策にはとくに注意が必要である。
- 文献**：34.

執筆者：桐原佳介

クロサギ コウノトリ目サギ科

Egretta sacra (Gmelin, 1789)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



米子市日野川 2005.2.6 / 撮影：田中一郎

- 選定理由**：岩の多い海岸でくらす鳥であるが，県内の海岸は砂浜が多いため，生息に適した立地が限られている。
- 特徴**：全長約62 cm。黒色型（ほぼ全身が石板黒色）と白色型（全身白色）とがあるが，九州以北では白色型はごく稀。嘴は太くて長く，黒褐色や黄褐色など。脚は短めで，黄緑色または緑褐色。岩の多い海岸に留鳥として生息し，魚や甲殻類，貝などを食べる。
- 分布** 県内：境港市から岩美町まで，県内海岸線のほぼ全域にわたって記録があるが，河口付近や漁港での観察例が多い。県外：本州・四国・九州・南西諸島；東南アジアからオセアニア。
- 保護上の留意点**：岩礁海岸および周辺地域の保全が重要となる。
- 文献**：17, 48.

執筆者：一澤 圭

コウノトリ コウノトリ目コウノトリ科
Ciconia boyciana Swinhoe, 1873

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅危惧IA類 (CR)



米子水鳥公園 2001.10.25/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：米子市日久美遺跡から頸椎，鳥取市青谷上寺地遺跡から脛足根骨などが出土しており，かつて鳥取県に生息していたのは確実である。

■**特徴**：全長110 cm内外。風切が黒のほかは体は白色。太くて長い黒色の嘴と淡紅色の脚が特徴。かつては日本全国の水田，湿地，湖沼に留鳥として生息していたが，現在は野生の繁殖集団は絶滅。冬鳥としてまれに大陸から1羽か2羽が渡来するのみ。水田や湖沼などで採餌し，樹上で休むことがある（この習性はツル類ではみられない）。

■**分布** 県内：かつては留鳥であったと考えられるが，現在では迷鳥としてまれに記録されるのみ。近年では，2001年に米子市日野川や米子水鳥公園に飛来したほか，2006年には鳥取市気高町日光で，2009年には鳥取市国府町奥谷で確認されている。県外：ロシアアムール川周辺やウスリー地方で繁殖。中国中南部で越冬。

■**特記事項**：国の特別天然記念物（1956年指定），「種の保存法」規制対象種。

■**文献**：2, 13.

執筆：井上貴央

ヘラサギ コウノトリ目トキ科
Platalea leucorodia Linnaeus, 1758

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：情報不足 (DD)



米子水鳥公園 2010.3.27/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の生息地がきわめて限定される。個体数も非常に少なく，近年飛来頻度が減少傾向にある。

■**特徴**：全長83 cm内外。全身白色で，嘴は黒くてしゃもじのような形をしていて，先端は黄色い。目は赤く，脚は黒い。河口や水田，湖沼などに飛来し，浅い水辺を歩き回りながら嘴を左右に振って水中を探り，小魚やエビ等を捕食する。

■**分布** 県内：米子市米子水鳥公園にほぼ毎年1羽ずつ飛来するほか，米子市日野川河口，倉吉市天神川河口，鳥取市気高町日光池付近でも記録がある。県外：数少ない冬鳥または旅鳥として飛来；ユーラシア大陸中部，インド，アフリカ北部に生息し，冬は南部へ移動。

■**保護上の留意点**：水生生物が豊かな，浅い湿地の保全が重要。

■**文献**：34, 35, 36, 38.

執筆：桐原佳介

クロツラヘラサギ コウノトリ目トキ科
Platalea minor Temminck & Schlegel, 1849

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧IA類 (CR)



成鳥冬羽 米子水鳥公園 2010.4.3/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：世界的希少種で，2009年1月現在，世界の総数は2000羽程度と考えられている。飛来地が限定され，飛来数も非常に少ない。

■**特徴**：全長77 cm内外。全身白色で，嘴から額，目の周囲にかけて黒く，脚も黒い。幼鳥は風切羽の一部が黒くて嘴が肉色をしている。嘴はしゃもじのような形をしている。浅い水辺を歩き回りながら嘴を左右に振って水中を探り，小魚やエビなどを捕食する。

■**分布** 県内：米子市米子水鳥公園にほぼ毎年1羽ずつ飛来しており，越夏した記録もある。その他，米子市日野川河口，鳥取市湖山池でも記録がある。県外：数少ない冬鳥または旅鳥として少数が飛来し，主に九州地方に飛来する。；朝鮮半島の西海岸と中国の一部で繁殖，台湾，ベトナム，中国南部，香港，韓国で越冬。

■**保護上の留意点**：水生生物が豊かな，水深の浅い湿地の保全が重要。

■**文献**：35, 36, 37, 38.

執筆：桐原佳介

マガン カモ目カモ科

Anser albifrons (Scopoli, 1769)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥根県安来市 2009.1.3/撮影：田中一郎

■**選定理由**：県内では米子水鳥公園をねぐらとする個体群が増加傾向にあるが、その飛来地は限られている。

■**特徴**：全長65–85 cmほど。嘴の基部は白く、腹部に黒い帯がみられる。冬鳥として県内の湖沼や池に飛来し数百羽の大きな群れで行動する。

■**分布** 県内：過去5年間では岩美町、鳥取市、湯梨浜町、北栄町、米子市などで記録されている。定期的な飛来地として、米子水鳥公園をねぐらとする群れがいる。県外：新旧両北区のツンドラ地帯で繁殖し、ヨーロッパ、カスピ海、中国、韓国、日本、アメリカ、メキシコなどで越冬する。

■**保護上の留意点**：警戒心が強く、湖畔の公園化・宅地化・湖岸道路の設置によって生育地が失われている。また、採食地の水田では、道路によって分断されない400 m四方以上の水田が必要とされている。米子水鳥公園では、マガンのねぐらの保全のために草刈りや水位調整を行っている。飛来数の維持には、ねぐらと採食環境である水田の環境維持が必要である。

■**文献**：14, 15, 49.

執筆：神谷 要

ヒシクイ カモ目カモ科

Anser fabalis (Latham, 1787)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



米子水鳥公園 2008.11.3/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の飛来地が限定され、飛来数が非常に少ない。

■**特徴**：全長85 cm。全身が暗褐色で、背中、脇の羽毛に淡色の縁取りがある。嘴は黒く、先端付近に橙色の斑紋がある。地上や水面で、おもに植物質を採食する。「ガハハーン」と低大きな声で鳴く。マガンの群れに混じって行動することもある。

■**分布** 県内：岩美町、鳥取市、北栄町、倉吉市、米子市で記録があるが、米子水鳥公園にはほぼ毎年少数が飛来している。湯梨浜町東郷池では越冬記録がある。県外：冬鳥として本州中部以北に飛来するが、局地的である。湖沼、池、湿地、水田などに生息する；ユーラシア大陸北部で広く繁殖、冬はヨーロッパ中部、中央アジア等に渡って越冬。

■**保護上の留意点**：ねぐらと採食環境が同時に保全されていることが重要。生息地となっている地域は、生息環境の改変に注意すべきである。

■**文献**：34, 53.

執筆：桐原佳介

オオハクチョウ カモ目カモ科

Cygnus cygnus (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：—



成鳥 米子水鳥公園 2000.3.16/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：生息域となる湖沼の環境悪化によって飛来が可能な水域が減少している。

■**特徴**：全長140–165 cm。コハクチョウより大型でくびと嘴が長い。日本には冬鳥として飛来し、河川河口、開けた池、山間の池などに生息する。越冬地は、コハクチョウより北よりで県内への飛来は少ない。コハクチョウに比べてやや狭い水域にも飛来する。コハクチョウ同様に水田で水生植物を採食することもある。

■**分布** 県内：水尻池、天神川河口、米子水鳥公園など。県外：東北・北海道が主要越冬地。アイスランドやロシアのタイガ地帯の湖沼で繁殖。

■**保護上の留意点**：夜間の安全なねぐらの確保が重要な課題となる。飛来地である地域は、湖岸の整備などを控え、人が容易に近づくことができないようなねぐらを整備すべきである。ねぐらは、コハクチョウよりも小規模な湖沼にも形成される。

■**文献**：3.

執筆：神谷 要

コハクチョウ カモ目カモ科

Cygnus columbianus (Ord, 1815)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



米子水鳥公園 2009.10.17/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：中海周辺は西日本最大の集団越冬地であり、学術的に重要。現在飛来数が多いが、環境の変化によって減少するおそれがある。

■**特徴**：全長約120 cm。全身白色で、嘴は中央から先端は黒く、つけ根付近は黄色い。脚は黒い。「コォー、コォー」と大きな声で仲間どうし鳴き交わす。地上や水面、水底の植物質を採食する。

■**分布** 県内：米子市米子水鳥公園が県内最大の飛来地だったが、2004年以降飛来数が激減した。その他、鳥取市千代川、日光池、湯梨浜町東郷池、倉吉市天神川などで確認されている。県外：冬鳥として本州以北の湖沼、河川、内湾、水田などに飛来・生息する；ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北部で繁殖し、冬は南部に移動して越冬する。

■**保護上の留意点**：採食地となる広大な水田地帯と、ねぐらとなる浅くて広い湿地が隣接して存在することが重要。コブハクチョウは激しく威嚇して群れを追い払うので、生息地から排除することが望ましい。

■**文献**：34.

執筆：桐原佳介

ツクシガモ カモ目カモ科

Tadorna tadorna (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



米子水鳥公園 2003.1.10/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：おもに干潟を生息地とするが、鳥取県ではそのような環境は少ない。そのため、干拓途中の湿地や、休耕田など干潟状の環境になっている場所に飛来していることが観察されることがある。しかし、このような環境は安定的に持続しないのでその飛来の維持が心配される。

■**特徴**：全長60 cm前後の緑色の頭部に赤い嘴が非常に美しいカモで、花ガモの別称もある。まれな冬鳥として、県内の河口域・干拓地・米子水鳥公園などに飛来する。干潟や河口域を生息地として、底生生物を食べる。

■**分布** 県内：米子水鳥公園など。県外：日本には、西日本を中心として局地的に飛来。スカンジナビア半島、カスピ海からモンゴル、中国北部で繁殖する。南ヨーロッパ、インド、中国、朝鮮半島、台湾で越冬する。

■**保護上の留意点**：河口域の河川改修や干拓工事によって、その生息地の多くが失われている。干潟の自然再生などの生息地の自然再生が重要な課題である。

■**文献**：—

執筆：神谷 要

オシドリ カモ目カモ科

Aix galericulata (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：情報不足 (DD)



米子水鳥公園 2008.3.4/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：営巣に必要な樹洞のある樹木が減少し、生息環境が悪化している。

■**特徴**：全長約45 cm。淡水性のカモ。雄の冬羽はカモ類中とくに美しく鮮やか。三列風切の一对は橙色で帆のように立ち銀杏羽と呼ばれる。後頭部に冠羽。水辺に近い樹洞に営巣し、水面に突き出た横枝でも休息する。冬季は群れで生息。おもに水草の若葉・浮き草・草の種子・水生昆虫などを食べる。晩秋から春先まではシイ、カシ、ナラ類のドングリが主食。

■**分布** 県内：平地から山地の湖沼および河川に生息。個体数は10月が最多となる傾向。県外：おもにウスリーと中国北部で繁殖、中国南部で越冬。日本ではおもに北海道と本州中部以北で繁殖し、本州以南で越冬。

■**保護上の留意点**：営巣に適した樹洞のある樹木の減少を補う巣箱の架設および湖沼の周辺にシイ・カシなどの植栽で採餌環境の造成は有効。

■**特記事項**：鳥取県の鳥（昭和39年指定）。

■**文献**：40.

執筆：福田紀生

トモエガモ カモ目カモ科

Anas formosa Georgi, 1775

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



雄 米子水鳥公園 2008.2.20/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の河川や湖沼に冬鳥として飛来するが、近年、確認できる個体数が減少傾向にある。

■**特徴**：全長が40 cm程度で、マガモ属 (*Anas*) の中ではコガモに次いで小さいカモである。雄の顔には黄色、濃緑色、黒の巴型の模様があり、これが和名の由来となっている。雌は地味な褐色で、嘴の基部に小さな白斑がある。おもに種子など植物性の餌を食べ、ドングリも餌にする。広い水面の中央に出ることは少なく、周囲に樹木のある池などで目にする事が多い。

■**分布** 県内：県内各地の水域で確認されるが、生息する水域が限定される傾向にある。県外：冬鳥として北陸以南の各地に渡来する。年による渡来数の変動が大きい。

■**保護上の留意点**：警戒心の強いカモであり、人影にも敏感に反応する。落ち着ける環境の確保が不可欠である。

■**文献**：1, 4, 10.

執筆者：吉田 亮

ヨシガモ カモ目カモ科

Anas falcata Georgi, 1775

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



西伯郡南部町 2010.5.5/撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の越冬数が少ない。

■**特徴**：全長48 cm。雄は頭部が光沢のある緑色で、前部から頭頂部にかけては紫褐色で、ナポレオンの帽子のような形をしている。嘴は黒い。体は白地に細かい黒の縞模様が入り、灰色に見える。三列風切羽が鎌状に長く伸び、垂れ下がる。下尾筒両脇に三角形の黄白色斑がある。「ホイップルルル」と鳴く。河川、湖沼に生息するが、山地のダム湖や農業用ため池など、森に囲まれた湖や小規模な池でも見られる。

■**分布** 県内：千代川、湖山池、東郷池、天神川、日野川、米子水鳥公園、中海など、各地に飛来するが、いずれも数が少ない。県外：冬鳥として本州中部以南に飛来し、北海道では少数が繁殖、シベリア東部から中国東北部、サハリンで繁殖、朝鮮半島から中国南東部で越冬。

■**保護上の留意点**：現在主要な生息地となっている河川や湖沼の保全と、ダム湖やため池など森林に囲まれた水面の保全が重要。

■**文献**：45.

執筆者：桐原佳介

シノリガモ カモ目カモ科

Histrionicus histrionicus (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：—



鳥取市青谷町 2010.3.17/撮影：田中一郎

■**選定理由**：冬鳥として渡来するが少ない。

■**特徴**：全長約40 cmの海ガモ。成鳥雄は青味がかかった黒色でくちばしの付け根、側頭部、胸などに多様で鮮やかな白斑、雌は黒褐色で顔の前面と側頭部に白斑をもつ。少々波が荒くても活発に潜水採餌する。

■**分布** 県内：鳥取市白兎海岸などの岩礁海岸、あるいは鳥取市賀露海岸や米子市皆生海岸など、離岸堤やブロックなどで構築された潜堤のある海岸。県外：おもに関東・中部以北の岩礁海岸で越冬、少数は東北地方の溪流で繁殖。シベリア東部・カムチャツカ・アラスカ・北米西海岸北部や大西洋側北米北部、などで繁殖、そのやや南方域で越冬。

■**保護上の留意点**：浅い岩礁海岸で採餌する習性から、潜堤など人口リーフの造成は生息域拡大に有効と考えられる。

■**特記事項**：東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群は、環境省レッドリストで絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) に指定されている。

■**文献**：5, 48.

執筆者：福田紀生

ホオジロガモ カモ目カモ科
Bucephala clangula (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



撮影：保井 浩

- 選定理由**：県内で越冬するが、個体数は少ない。
- 特徴**：全長約40 cmのカモ。成鳥雄の頭部は黒色で緑色の光沢、背面は黒くその他は白色。ほおには名前の由来となった白斑がある。成鳥雌は頭部が暗褐色、体上面は灰褐色。雌雄とも虹彩は黄色。2羽ないし小群で行動し潜水採餌する。
- 分布** 県内：湖山池、東郷池、米子水鳥公園（中海）などの広い湖沼。千代川、天神川、日野川など大きな河川。県外：九州以北に冬鳥として渡来するが、越冬個体数は、冬季に結氷する地域を除き北日本ほど多い。ユーラシア大陸・北アメリカ北部など広域で繁殖、それぞれのやや南方で越冬。
- 保護上の留意点**：潜水して採餌する習性から、水中に設置される魚網により被害を受けるおそれがある。
- 文献**：—

執筆：福田紀生

ミコアイサ カモ目カモ科
Mergus albellus Linnaeus, 1758

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



雄 鳥取市覚寺（八幡池） 2010.11.21 / 撮影：吉田 亮

- 選定理由**：県内全域の河川や湖沼に冬鳥として飛来するが、近年確認される水域が限定される傾向にある。
- 特徴**：全長が40 cm程度で、アイサ類の中では最も小さく、オシドリくらいの大きさ。雄は全身が白くて、目の周囲と後頭が黒く、胸側と背面にも明瞭な黒線がある。雌は全体が濃灰色だが、頭上から後頭にかけて茶褐色で、頬と首の全部が白い。頻繁に潜水して小魚や水生小動物を食べる。
- 分布** 県内：県内全域の水域で確認されるが、比較的広い河川や湖沼で見ることが多くなった。県外：冬鳥として九州以北に渡来する。北海道では少数が繁殖する。
- 保護上の留意点**：生息する水系の環境を保全し、餌となる魚類などの水生生物の多様性を維持する必要がある。
- 文献**：30.

執筆：吉田 亮

ミサゴ タカ目タカ科
Pandion haliaetus (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子市日野川 2010.3.27 / 撮影：田中一郎

- 選定理由**：魚食性のタカであるため、水質汚濁・悪化などによる魚類の減少、営巣に適した大径木の減少などが生存を危うくしている。
- 特徴**：後頭部に短い冠羽、頭部と体の下面は白。過眼線と翼の上面は黒褐色。翼は幅が狭いため細長く見える。全長55–65 cm、翼開長155–175 cmほど。雌は雄より大きい。餌場上空で停空飛翔しながら水中に急降下し、水面近くの魚を文字通りわし掴みに採餌する。県内では留鳥で、5–7月頃に、湖沼をのぞむ周辺の低山の尾根の高木の営巣、繁殖する。
- 分布** 県内：県内の主要な湖沼および河川。冬季には若干飛来数が増える。東部では湖山池周辺の山地で繁殖が確認されている。県外：国内ほぼ全域の海岸・湖沼・河川などの水域。ほぼ全世界に分布。
- 保護上の留意点**：生息水域の水質の汚濁・汚染の防止、営巣に適した大径木および岩場の保全に留意が必要。
- 文献**：48.

執筆：福田紀生

ハチクマ タカ目タカ科

Pernis apivorus (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



西伯郡大山町 2004.8.27 / 撮影：田中一郎

■**選定理由**：確認例も少なく、絶対的な数が少ない状況にあると思われる。
 ■**特徴**：全長60 cmほど、翼開長120–135 cm。ハチの幼虫を好んで食べるのでこの名がついているが、ヘビ、カエルなども捕食する。体の上面は暗褐色であるが、下面の羽の色は個体変異が多く白っぽいものから暗褐色まで様々なものがある。夏鳥として、東南アジアからほぼ全国的に渡来し、低山の森林で繁殖する。他のタカ類の古巣をよく利用する。

■**分布** 県内：ほぼ県内全域。県外：九州から北海道；サハリン、ロシア沿海州、シベリア南部などで繁殖。越冬地はインド、マレー半島、インドネシア、フィリピンなど。

■**保護上の留意点**：観察例が少なく県内の繁殖状況はよくわかっていない。生息環境から近年の低山地の森林開発の影響を受けやすいとみられ、早急な実態調査が望まれる。

■**文献**：—

執筆者：田中一郎

オジロワシ タカ目タカ科

Haliaeetus albicilla (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



成鳥 米子水鳥公園 2004.1.27 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内での越冬個体数が非常に少なく、飛来頻度が減少傾向にある。

■**特徴**：全長約90 cm。翼開長2 mを超える大型のワシ。全身褐色で尾羽が白く、嘴と脚は黄色い。飛翔時、翼は長方形で尾羽はくさび形をしている。あまり鳴かないが、威嚇時に「カッカカッ…」と鳴く。おもに魚類を捕食し、鳥獣の死体もよく食べる。海岸、湖沼、河川に生息する。

■**分布** 県内：鳥取市湖山池や米子市米子水鳥公園での記録が多いが、米子水鳥公園には近年飛来していない。そのほか、鳥取市千代川、湯梨浜町東郷池、米子市日野川などでも記録がある。県外：おもに北海道から東北の日本海沿岸で冬鳥として飛来し、北海道では少数が繁殖している；ユーラシア大陸中～北部に広く分布。

■**保護上の留意点**：行動圏内の自然環境の保全と、休憩場所となっているところに人間が近づかない配慮が必要。

■**文献**：34, 35.

執筆者：桐原佳介

オオワシ タカ目タカ科

Haliaeetus pelagicus (Pallas, 1811)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



成鳥 鳥取市湖山池 2005.1.25 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内での越冬個体数が非常に少ない。

■**特徴**：全長90–100 cmほど、翼開長230 cm内外と、大型の海ワシ。雌は雄より大きい。成鳥は額・小雨覆・脇羽および楔形の尾羽が白く他の部分は黒色。白黒のパターンと、大きな黄色のくちばしが目立つ。雌雄同色冬鳥で魚を主食とするが、カモなどの水鳥も捕える。

■**分布** 県内：鳥取市湖山池、まれに湯梨浜町東郷池および米子水鳥公園に渡来。湖山池には例年1羽ないし複数羽が越冬、その期間は概ね12月中下旬～2月下旬頃まで。県外：多くは北海道東部の海岸・湖沼・河川の流域で越冬。少数は本州北部および琵琶湖などで越冬。繁殖地は、ロシア極東地域のオホーツク海沿岸など。

■**保護上の留意点**：おもに魚食であることから水質を保全し、魚類の減少防止に留意。飛来した場合には極力そっとした取り扱いが望まれる。

■**特記事項**：「国の天然記念物 (1970年)」。「種の保存法 (1993年) 規制対象種 (国内希少野生動物)」。

■**文献**：—

執筆者：福田紀生